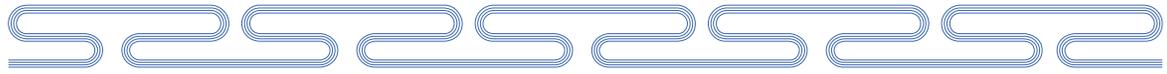




掘りday はちのへ

—八戸市埋蔵文化財ニュース 第2号—



丹後平(1)遺跡から和同開珎と蕨手刀が出土

平成10年6月、八戸ニュータウンのなかにある丹後平(1)遺跡の調査で、25号墳の周溝から和同開珎と蕨手刀が出土しました。丹後平(1)遺跡は奈良・平安時代の有力者の円墳があったところですが、すぐ南側には、かつて獅嚙式三累環頭大刀の柄頭が出土した丹後平古墳があります。

和同開珎は25号墳の西側の周溝から、蕨手刀は同じ古墳の東側の周溝から出土しました。

和同開珎は出土した時すでに3つに割れてお

り「開」字部分が欠落していました。文字はすっきりと精巧に表されています。直径は約2.5cmです。和同開珎は西暦708年に初めて鑄造されたといわれており、このことから25号墳は8世紀以降に造られたことが分かります。蕨手刀は柄頭が蕨に似ていることからこの名があります。全長は約54cm、刀身の長さは約42cmで蕨手刀のなかでは細身なのが特徴です。（渡 則子）

発掘調査の届出あれこれ

八戸市教育委員会が平成10年度に実施した発掘調査は、大規模開発から個人住宅の試掘に至るまで大小合わせて25件24遺跡にのぼります。総発掘調査面積は、40,000㎡余りでありました。この他にも、早急に調査をして欲しいという要望で、事業主(業者等)からの重機・作業員の提供を受け試掘した箇所も数件ありました。

さらに、文化課窓口に来たり、電話で遺跡の有無の確認をする場合も多数あり、埋蔵文化財に対する地権者・業者の方々の認識もかなり高くなってきているのを感じます。

しかし、中には遺跡の有無を確認しないまま建築着工を準備万端にした上で開発指導課に確認申請し、遺跡の存在を指摘されて当課に確認にくる場合も数件はあります。

こうしたケースは最も困り、当方の年間スケジュール並びに担当職員の日程が決定している中での突発的な調整は困難を要するからです。協議ができる状況になるならいざしらず、中には、「工事を進めるぞ」と強硬手段に訴えるケース、「困った、何とかして欲しい」と泣きついてくるケースなど様々な状況が生じてきますが、結局は、何とか調整して調査を実施していくこととなりますし、また、そうしていかねばならないと痛感している昨今ではあります。

しかし、これはあくまで個人住宅の建築等小規模な調査の例であり、宅地造成・道路建設・各種施設などの場合はこの限りではないことを

付け加えておきます。

ところで、発掘調査は、一部の範囲確認調査を除けば、文化財保護法の規定による届出(通知)の提出を受け、事業者と協議の上で実施することになります。平成10年度に届出(通知)があったのは52件(現地踏査依頼は33件)。うち何らかの発掘調査を実施(事業者負担を含む。但し、継続調査で既に提出済みは除く。)したのはおよそ10件。平成11年度に調査予定が約10件。

すなわち、年間の届出数に対し、調査が必要となる割合は4割弱。そのうち当該年度の調査と翌年度の調査が約半々。以前からの継続調査等を含めれば年間の調査件数の半数以上が前年度のうちに決定してしまいます。しかも、前年度中に協議があつて、当該年度に届出をするケースも若干あるため、個人住宅等の調査であれば、年度内、しかも工事の時期に合わせた調査は、5~7件は可能ですが、宅地造成等の規模が大きな調査では、例え試掘調査であっても、いきなりの届出には、すぐ対応は出来兼ねる状況です。その大きな要因のひとつは、調査量に対する専門職員の不足と思われれます。

それにつけても、土木工事等の予定がある場合は、出来る限り早く協議して欲しいと願うばかりであります。平成11・12年度は、住宅等の取得に係る税制度がかなり優遇されると聞いており、今後の動向が非常に気になるところであります。(坂川 進)

♪発掘おねえさん(高校三年生)♪ (作詞 ある発掘スタッフ M.O.)

1 番

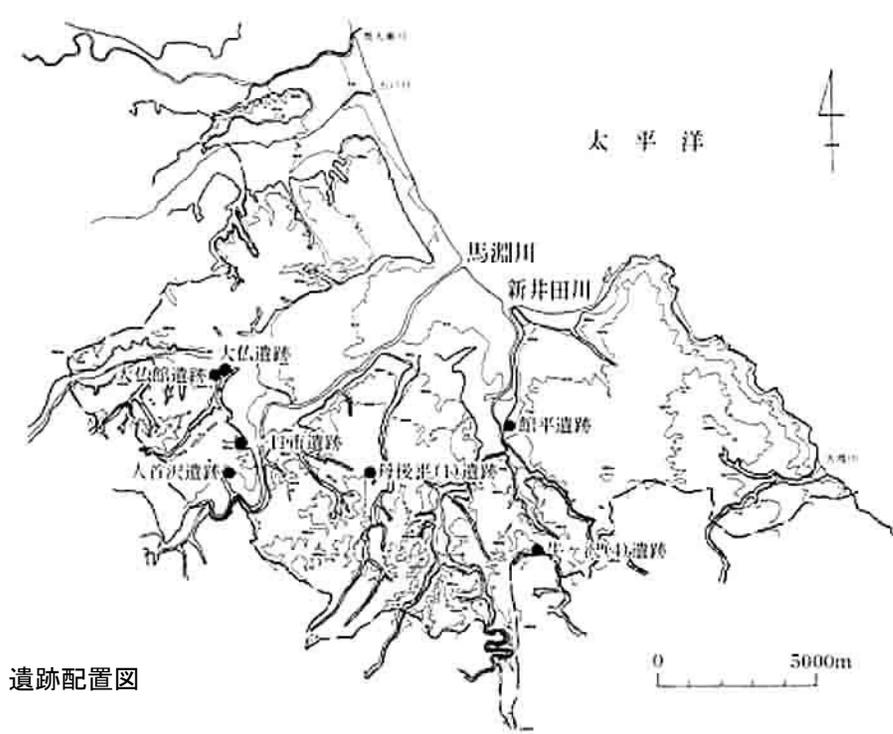
赤い夕日が 台地をそめて
杉の木かげに やがましね声
ああ—— あああ——
発掘おねえさん——
おらだち 離ればなれになろうとも
次の現場で また会おう——

2 番

泣いた日もある けんかをした日も
思いだすだろ なつかしく
ああ—— あああ——
発掘おねえさん——
おらんど 持場それぞれ違っても
元気に集まる—— ネコ山に——

3 番

雨が降り出し 待機の声が
みんなかけこむ プレハブに
ああ—— あああ——
発掘おねえさん——
いつも みんな楽しく働くと
心に誓うよ かととーくーにー



遺跡配置図

掘り出された土器のゆくえ

発掘調査で土の中から掘り出された土器には、その土器を作り使った人々の多くの情報が隠されています。その情報を探り出すために、私達はいろいろな角度から土器を調べて記録します。ここでは掘り出された土器がどのように調査・整理されるのか紹介したいと思います。



① 洗う
水で洗ってきれいにします。また、どんな土で焼かれているか観察します。



④ 接合する
接着剤で破片をくっつけます。ゆがみがでないよう細心の注意が必要です。



② 注記する どの層・どの位置から出土したか、ひとつひとつの土器に書き込みます。土器の身元を証明する大事な作業です。



⑤ 接合完成
元の形に復元されました。大きさや形がよく分かるようになりました。



③ 並べる 破片を隣同士くっつくように扇形に並べます。土器の作り方や文様を観察します。



⑥ 石膏をいれる 土器の足りないところに石膏を入れて補強します。



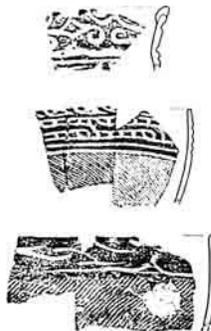
⑦実測図をかく
土器をよく観察し、大きさや形、文様や使われた痕跡など、特徴をよく表すように図面にして記録します。



⑩写真を撮る 実測図では表しにくい雰囲気写真を記録します。



⑧拓本をとる
小さな破片などは実測図を書かずに拓本で特徴を記録する場合があります。



⑪報告書を刊行する 調査で検出された遺構や遺物を図や写真、文章で記録し報告書に載せます。これをもって、発掘調査事業は終了します。



⑨実測図をトレースする 報告書に見やすい図を載せるため製図ペンでトレースします。



⑫展示する 特に重要な遺物は博物館に展示して誰でも見られるようにします。

⑬収蔵する 展示されるもの以外は収蔵庫で保管します。

牛ヶ沢(4)遺跡(うしがさわ)

牛ヶ沢(4)遺跡は、八戸市の中心街から南々西約6kmの地点に位置し、遺跡の南側が階上町と接しています。地形は、北から南側に傾斜し、斜面の下には松館川の支流が東西に流れています。標高は約50～100mです。

今回の調査で注目されることは、今から約9,000年以上前の縄文時代早期前葉の集落跡が発見されたことです。この時代の集落跡は、現在のところ東北地方で最も古い部類に入り、三内丸山遺跡よりも3,000年も遡るものです。

住居跡は斜面上に造られ、合計7棟検出されました。形は楕円形のものが多く、最も大きなものは長さが8m40cm、深さが70cmです。住居跡の中からは、住居の上屋を支える柱(主柱穴)や壁などを支える柱穴(壁柱穴)がたくさん確認されました。炉の跡は確認されませんでした。屋外から蒸し焼きや石焼きの調理の施設として使用されたと思われる焼石炉しょうせきろが1基検出されました。また、1棟だけですが地面を階段状に削り出し、出入り口と思われる場所も確認されています。これらは、当時の住居構造を知るうえで貴重な資料になるものと考えられます。

何故これらの住居跡が9,000年以上も前のものなのかと言うと、当時の遺物や年月の経過とともに住居の中に入り込んだ土砂の堆積状況や出土土器からおよその年代が解るからです。



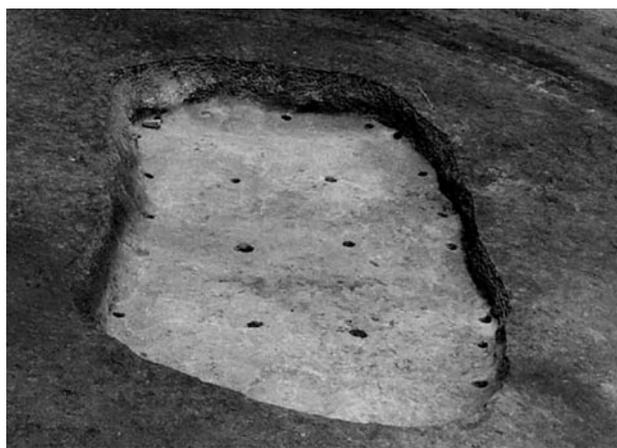
遺跡全景

住居内からの遺物は、縄文時代早期前葉の押型文(日計式)に伴う縄文土器が出土しています。押型文とは棒状のものに文様を刻んで、土器のうえにそれを押ししたり回転させる文様です。堆積状況からは、住居内に土砂が埋まり切る過程で、火山灰が約10cmの厚さで堆積していました。これは、十和田火山から噴火した南部浮石(ゴロタ)という火山灰です。この降下時期は、いまから8,600±250年前という測定例がありません。そうすると当然これらの住居は南部浮石が降下する以前のもと考えられます。よって、これらの住居跡は南部浮石が降下する以前、土器から判断すると、少なくとも今から9,000年前ということが考えられます。

土器の年代は、時代が古くなればなるほど難しく、時には土器型式が逆転(古いと思われたものが新しく、新しいと思われたものが古く)することもあります。

その他、ここでは各時期の住居跡が数多く検出されています。内訳は、縄文時代早期中葉1棟、早期後葉6棟、前期3棟、後期8棟、弥生時代7棟、奈良時代2棟です。

牛ヶ沢(4)遺跡は、まだ調査予定面積の20%しか発掘を行なっていません。調査はあと数年続く予定です。全体を調査することにより、少しずつですが過去が紐解かれていくものと思われます。(村木 淳)



縄文時代早期の竪穴住居跡

館平遺跡（たてひら）

館平遺跡は、八戸市の中心部から直線距離で約3.5kmの地点に位置し、遺跡は新井田川と松館川が合流する右岸、標高6～37mの段丘上に立地しています。

この遺跡は古くから根城南部家一族、新田氏^{にいだ}の居城である「新田城」が築城された場所として知られています。城は本丸と外館からなる中世城館で、空堀が比較的良好な状態で残されています。寛永4年(1627)根城南部家が遠野(岩手県)へ村替になるまで新田氏が居城していました。明和3年(1766)には、八戸藩2万石の5代藩主であった南部信興^{のぶおき}の御殿が本丸跡に造営されています。

現在、本丸跡には新田八幡宮が、外館には新井田小学校が位置しています。

昭和29・30年には慶應義塾大学の江坂輝弥氏による発掘調査が行なわれ、縄文時代早期前半(約9,000年前)の尖底深鉢形土器が出土したことで全国的にも知られる遺跡となりました。

今年度は、携帯・自動車電話無線基地局建設工事に伴い、工事対象予定地の内、鉄塔が建つ

約64㎡を発掘調査しました。

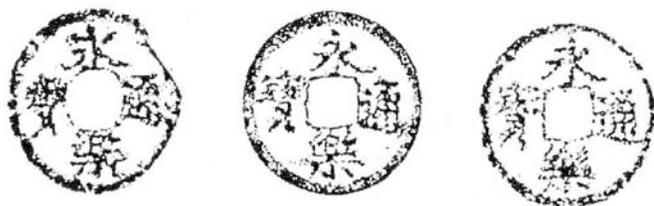
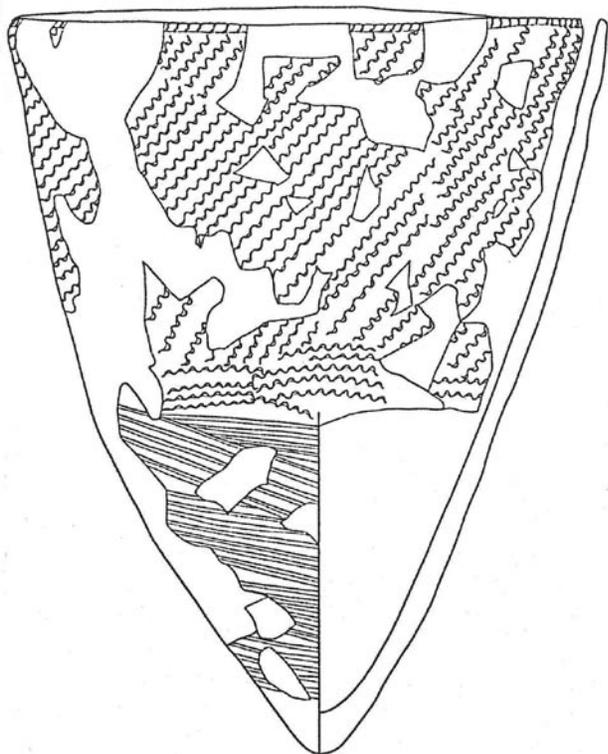
縄文時代早期中葉の竪穴住居跡1棟、中世の掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡よりも新しい時代の土坑4基が検出されました。

竪穴住居跡は、約8,600年前の十和田火山の噴火でつもった火山灰の「南部浮石層」^{なんぶふせき}の下から検出されました。竪穴住居跡の中からは4個体分の縄文土器片と、磨製石斧5点、石錘^{せきすい}(=網のおもり)1点、石皿1点、^{たたきいし}敲石5点、スリ石4点が出土しています。①遺物の出土状況をみると、かなり離れた場所からバラバラの状態です。出土したものが接合していること ②遺物が出土した面の高さをみると、ほぼ同じ状況を呈していることから一括廃棄されたものと考えられました。

縄文土器は、アカガイ、サルボウなどの貝殻でつけられた貝殻文、沈線文、刺突文などを合わせた文様が描かれており、形は底部の尖った深鉢形をしています。これらの土器は、三戸町の寺の沢遺跡で最初に発見された土器と似ていることから「寺の沢式土器」と呼ばれています。

縄文時代早期中頃の日本列島は関東を境に、東日本の「沈線・貝殻文土器文化」と、西日本の「押型土器文化」のふたつの文化圏がみられます。

掘立柱建物跡の柱穴の底面からは、中国銭の永楽通宝3枚が出土しています。柱を建てる際の地鎮^{じちん}に関わるものと考えられます。この建物が建てられたのは永楽通宝が初めて鑄造された年代の1408年以降と考えられます。(藤田俊雄)



人首沢遺跡（ひとくびさわ）

人首沢遺跡は、馬淵川左岸の丘陵地にあり、八戸市大字櫛引字人首沢、字馬場瀬にある遺跡です。東北縦貫自動車道が遺跡を通るため、道路部分約12,000㎡の面積を発掘調査しました。その結果、遺跡南側のやや高い平らな地形の場所から古代の集落が見つかりました。

集落からはカマドを備えた四角い形の竪穴住居跡が5棟、カマドを持たない竪穴遺構1棟、円形周溝と呼んでいるドーナツ形の溝2基等が発見されました。竪穴住居跡からは、食事用の椀や煮炊きに使う甕などの土器類がまとまって出土しています。人首沢遺跡の古代集落は、土器の形や作り方の特徴から、約1,300年くらい前の飛鳥時代から、続く奈良時代にかけて営まれたものと考えています。

「人首沢」の由来はよくわかりません。調査の初めの頃は、人の頭がゴロゴロでてるのではないかとスタッフ共々不安なものがありました。

大仏館遺跡（だいぶつだて）

八戸市大字尻内地区に所在する大仏館遺跡は、今年から農地造成に伴う本格的な発掘調査が始まりました。発掘地点は、南北にのびる丘陵の西側斜面で、平野部からは山の陰となって見えないすりばち状の地形となっています。発掘は10月から12月にかけて行われましたが、おかげで調査中はあまり北風にさらされることが少なくてすみました。ここはまた、尾根に立つと東側を流れる馬淵川や周囲の平野部が見下ろせる眺望の開けた場所でもあります。

西側斜面を約2,000㎡程の面積を調査したところ、中腹を中心として今から1,100年くらい前のものと考えられる平安時代の集落が見つかりました。集落は、溝で区画され、その中に竪穴住居跡が4棟、土坑が13基ほどつくられています。遺構からは、土器や鉄器の他に、小鍛冶の送風管と思われる土製の羽口が出土しています。集落の中で鉄器を加工・修理する鍛冶が行われていたことがわかりました。（宇部則保）



人首沢遺跡の古代集落



人首沢遺跡の遺構確認状況（黒い部分）



大仏館遺跡の発掘風景



竪穴住居跡を実測するスタッフ

一日市遺跡（ひといち）

一日市遺跡は、八戸市の南西部に位置し、馬淵川左岸の丘陵上にあります。土器のかけらが畑や果樹園の土の表面から見つかったので、ここが遺跡であることは分かっていたのですが、実際に発掘調査するのはこれが初めてでした。

約200㎡を調査した結果、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡3棟、竪穴遺構1棟、溝跡4条、土坑2基が見つかりました。ほとんどが平安時代のものと考えられます。遺物は、奈良・平安時代の土師器を中心として、須恵器、縄文土器、石器等が出土しました。おそらく、奈良・平安時代の集落が形成されていたものと思われる。



調査区全景（西→東）

ほったてばいらたものと
掘立柱建物跡



白いスプレーで囲んだ穴が全部で10個見えます。この穴は昔の人が柱を建てるために掘り込んだものです。縦に4本、横に3本の柱を持つ建物がここに存在していたのです。柱と柱の間隔は、縦が約2.2m、横が約2.4mあります。平安時代のものと思われる。

ところで、この調査にはちょっとした思い出があります。最初奥の柱穴3つは見えませんでした。なぜなら、調査区の外にあったからです。柱穴の並び方からするときっとあると予想は出来たのですが、調査区を拡げることを私はためらいました…調査区を拡げることは、それだけの時間とお金を必要とするからです。それに、何も出てこなかったら…結局、探求心と上司の助言もあって拡げてみることにしました。思った通りでした。表土をどけるとそこからは3つの柱穴が出てきました。私は掘立柱建物跡の正確な規模を知ることが出来、ある種の賭けに勝った気持ちでした。調査区の南側が変な形にふくらんでいるのはそのためです。今回はうまくいきましたが、実際は失敗の方が多いかもしれません。

溝跡のセクション



左の写真は溝跡の中の土の断面です。白く見えるのが、平安時代に朝鮮半島の白頭山が噴火した時、日本海を渡って東北北部に降り積もった火山灰です。この火山灰から溝跡もそのころのものだと判断出来ます。掘立柱建物跡の写真を見て下さい。この溝跡が中央手前の柱穴の上を横切っています。このことから、柱穴より溝跡の方が新しいということが分かります。（藤谷一徳）

大仏遺跡（だいはつ）

大仏遺跡は、八戸市の中心部から西へ約6kmに位置し、馬淵川と浅水川に挟まれた15～30mほどの低段丘に立地しています。同遺跡は『南部諸城の研究』によると「尻内館」として記され、「主郭・外郭があり堀が巡る中世の館跡であった」と紹介されています。

平成9・10年度の発掘調査では、約10,000㎡を調査し、竪穴住居跡・竪穴建物跡・溝跡・土坑等多くの遺構が見つかりました。また傾斜地をコの字に削り出した平場(面積約600㎡)も確認されました。その平場に掘立柱建物跡7棟・竪穴建物跡2棟・堀跡・溝跡が見つかり、数回の建物の建て替えを行なっていることがわかりました。竪穴住居跡は、全てカマドを南壁すずに設けています。SI25竪穴住居跡の床面から珠洲系の甕の破片と土師器片が共に出土し、12世紀後半に住居を廃棄したと考えられます。大仏遺跡で発見された古代の竪穴住居跡・土師器の年代は10世紀後半から12世紀後半と考えられます。今まで八戸周辺では10世紀後半以降まで土師器を使用していたと考えられていましたが、SI25の出土状況より当地方では12世紀までカマドと土師器甕を使っていたことがわかりました。

ほかに竪穴建物跡や土坑などから、青磁碗・珠洲焼甕・常滑焼甕・信楽焼甕・瀬戸産卸皿・

かわらけの破片が出土しました。2ヶ年の発掘調査の結果、大仏遺跡は平安時代後半から中世（10世紀後半～15世紀頃）にかけての遺跡とわかりました。とくに八戸周辺ではまだ明らかになっていない11世紀～13世紀の遺物・遺構の発見が大きな成果となりました。当地方の平安時代の終わりから鎌倉時代の社会を知る上でも貴重な発見となりました。また今回調査で検出した遺構がどのような性格であったか今後詳細に検討する必要があります。平成11年も一部調査を残しており、新たな発見が期待できます。

(大野 亨)



SI25出土の珠洲系甕と土師器甕

